



東日本大震災から5年を迎えて思う

聖学院大学ボランティア活動支援センター 所長
人間福祉学部 教授
阿部 洋治

「あなた方を見て、いつも、どんな大学に通っているのかな？と思って来たの。それで、来年は、是非、お訪ねしたいと思っているのよ。」2014年12月「サンタプロジェクト4」の郷土料理づくりをご指導下さった郷土料理研究家のお一人が熱く語って下さいました。それは、ちょうど、「2015年のヴェリタス祭には、『釜石フェスティバル』（略称「釜フェス」）をしよう」との構想を練り始めていた時でありました。時間の経過と共に、被災地でのボランティア活動が少なくなって来ている状況の中で、この大学の学生たちが、今もなお、心を込めて、釜石と関わらせていただいていることをもっと地域の人々に知っていただきたい、またこの地域の人々と釜石の人々とがつながるきっかけを作りたい。これが、この「釜フェス」のねらいでありました。

こうして撒かれた小さな種が、いくつかの実りをもたらすことになっています。その一つは、5年間にわたり、被災地と関わり続けている大学として知られるようになり、このことで、また、新しい出会いが与えられたことです。「手編みで作った膝掛けを送るので釜石の方々にとどけていただけませんか。」「私たちの高校の生徒も参加させていただきませんか。」こんな依頼も受けました。

この一年を振り返って、もう一つ特筆しておきたいことがあります。それは、2014年11月、創作農家「こすもす」を経営している藤井さんご夫妻宅に数名で宿泊のお世話になり、甲子(かっし)柿と出会ったことです。釜石との関係の生みの親ともいべき野口祐子教授の発案から、障がい者事業所グローブ(上尾市上尾村)の協力により、「甲子柿ジャム」が製品化され、いよいよ、夏前から商品として売りに出されるに至りました。

小さな出会いが、新しい歴史を作り出す。釜石との関わりをとおして教えられる教訓です。学生たち自身、この出会いをとおして、大きく変えられ成長させられています。東日本震災後の日本の歴史をその根底から作り変える小さな働き人が、ここから育って行くことを期待する所以です。

この他には、同窓会の支援を受け、ボランティア活動助成公開審査会がスタートしました。学内ボランティア・グループが、活動内容や予算を発表し、それを聞いた参加者(学生を含む学内関係者および地域のボランティア関係者)の審査によって活動資金の支援が与えられる会です。学生たちは、デモンストレーションの経験を積むことになるだけでなく、他のグループの活動の刺激を受けたり、また地域の方々との出会いの場ともなっております。